

Report

アジアで学ぶ英語

「アジアで一番英語が下手な国民は？」という小話がある。答えは「日本人とタイ人」。「アジアでこの2国だけが植民地になっていない。だから英語を身につける必要がなかった」というもつともらしい理由がついている。ちなみに「名議長とは国際会議で日本人を喋らせることができる人」というジョークもある。

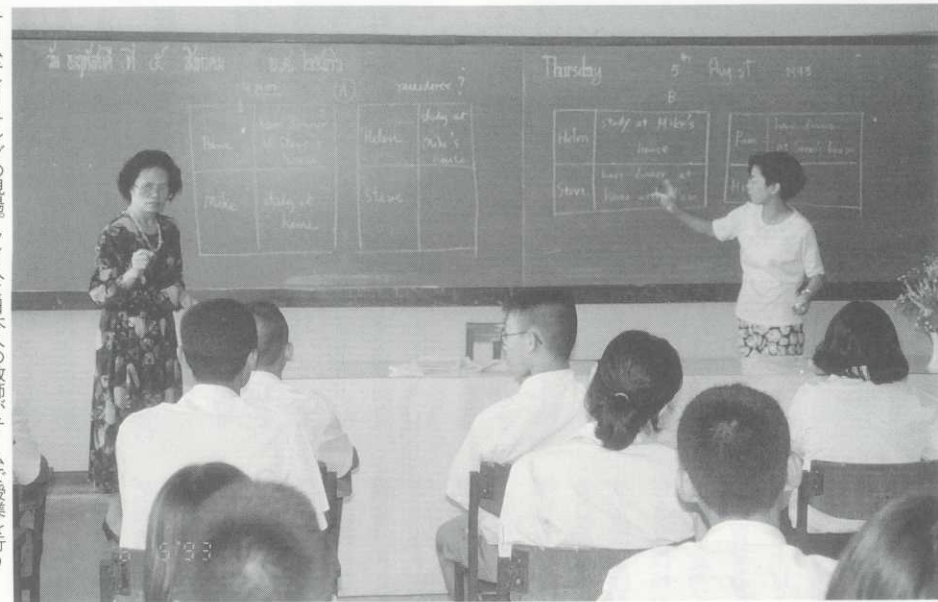
その日本人とタイ人の教師とで中高校生に共同して英語を教えよう、というプログラムがある。神奈川県小田原市にあるLIOJ(LANGUAGE INSTITUTE OF JAPAN)が昨年からのスタートした。「タイランド/ジャパン・チームティーチング交換プログラム」がそれだ。

プログラムを担当している米国人のジム・ケーニー(34)は、「英語を母国語としない教師が共同して教えることによって、情報・意見交換のできる機会を提供したかった」とその狙いを語る。

また、自治省などでも、外国人を英語教師として日本の学校に配置するJET

タイ人と日本人チームによる授業 相互理解のための 英語の試み

タイ人と日本人の教師が共同で英語を教える機関がある。いまや英語は、欧米の文化を学ぶためのものではない。英語を話す人＝国際人という認識も変わりつつあるようだ。



チームティーチングの現場。タイ人と日本人の教師がチームで授業を行う

の考えを学ぶことだった。だから教科書に出てくるのはジャックとベティで、ドラッグストアに行つてハンバーガーを食べるのが例文になっていたわけだ。

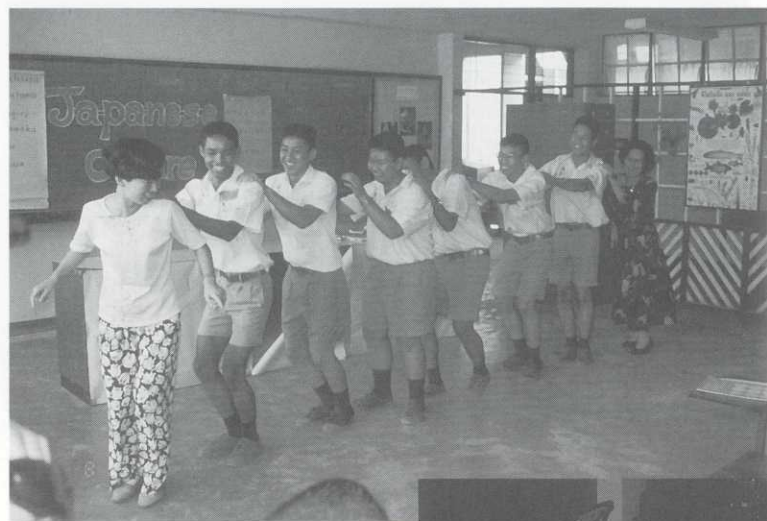
「左」日本の文化を紹介するカルチャークラス
「右」宿泊はタイ人の家にホームステイする
「下」学校に通ってくる子供たち

津田塾大学教授のダグラス・ラミスは、著書で、英会話の教師になることを勧める友人の言葉を紹介している。

「君は英語すら十分に知らなくてもいいんだ。私はイタリア人やドイツ人やフランス人が高等学校で学んだだけの英語を教えているのを知っている。人は言語を学ぶためにクラスへ通うのではなく、外国人に会う機会を持つためのさ」(ダグラス・ラミス著『イデオロギーとしての英会話』より)。英会話を学ぶことはそのまま英語を母国語とする欧米の文化を学ぶことであつた。

いろんな英語があつていい

チームティーチング・プログラムの参加者は日本でのオリエンテーションを経て、タイでのチームティーチング(約10日間)に参加する。タイ側のパートナーはバンコクに本部があるシーナカリン教育大学(SWU)。タイ全土にキャンパスを持つ国立大学だ。



ここでは日本人とタイ人の先生が、文字どおりチームになってタイ人の子供たちを教えていく。プログラムの目的は、言葉を通じたコミュニケーションと同時に、異なった文化の理解にもある。

「なんで英語やるの?」「英語を使ってお互いの理解を深めるため」というわけだ。だから参加者はタイの家庭にホームステイするし、また自分の興味に基づいて折り紙・けん玉・ゲームなどをアレン



ジし、日本文化の紹介をするカルチャークラスを持つ。

「意思疎通のためには、やはりタイ語を学ぶのが最適では?」という質問に、LIOJ事務局長・大野美之さん(34)は、「母国語がベストなのは当然です。しかし、現実的ではありません。英語はいまや欧米の言葉ではなく、国際語なのです。世界中で通用するこの言葉を利用しない手はありません」と語る。

プログラムという試みを行っている。すでに数多くの外国人がALT(アシスタント・ランゲージ・ティーチャー)として日本各地の教壇に立った。

93年にはのべ3785人が参加。うち約半数の1898人が米国、685人がイギリス、656人がカナダ、以下オーストラリア219人、ニュージーランド196人と続く。特徴的なのは中国からはわずかに11人、韓国からは93年に初めて12人が参加したに過ぎないこと。しかも、教師でなくコディネーターだ。

一方、日本企業の進出先としてますますアジアの占める割合は高まっている。

「私たちの英会話プログラムを終えた企業人の赴任先で、87年には14%に過ぎなかったアジア太平洋地域が、93年には26%を超えるまでになりました」とケーニーさん。「英語を学ぶ＝欧米人と話す」という図式は、現実にあわなくなっているようにだ。

なんで英語やるの?

これまで英語を学ぶ主な目的は、欧米

さらに、「タイ人にはタイ風の英語が、インドネシア人にはインドネシア風の英語があつていいはずだ。標準語も日本語ですが、方言だって立派な日本語でしょう」と笑った。

地域の国際化への挑戦

チームティーチングのプログラムはこれで終わりではない。タイでの活動と全く同じことが日本でも行われる。つまり日本人とタイ人の先生が、日本の学校で英語を教えるわけだ。

LIOJのプログラムもここで終わる障害にあつてはいる。つまり、アジア人を英語の授業に参加させるのはどうか、という学校の校長先生、そして教育委員会の判断とならざるを得ない。それに気づいた事務局では、いま、議会や役場を巻き込んだ「地域ぐるみ」のチームティーチングを計画している。

「英語を学びたい日本人は東南アジアの人たちと一緒にあって、アジアのスタイル、文化、歴史、政策を反映するアジア系の英語をつくり出してゆけばいい。そしてその時、もしアジアへやってきたアメリカ人が、この新しい英語が解らないと文句を言ったら、彼こそ、外国語学校へ送られるべきである」(前出ダグラス・ラミス著書)。

「地域の国際化」という名目のプログラムは、枚挙に暇がない。しかし、「国際化＝英語を話す＝欧米化」という既存の方程式にはまらない、新しい意味での国際化の挑戦は、いま始まったばかりだ。

写真提供◎LIOJ
文◎編集部



バンコクは別名「運河のまち」